

V 高大連携について連絡協議及び講演

1. 連絡協議の日程及び内容

○日時：平成21年1月20日 17:30～

○場所：福井大学附属病院

○内容：福井大学にて高大連携に関する第一回連絡協議会

参加者（敬称略、順不同）

福井大学教育地域科学部	三橋 美典
福井大学医学部	中井 昭夫
福井県立大学学術教養センター	清水 聡
福井県教育庁高校教育課	岩井 秀夫
富山大学保健管理センター	西村 優紀美
同大学学生支援センター	吉永 崇史
同大学学生支援センター	桶谷 文哲

1. 各事業報告

福井大医学部 中井先生より

文科省「子どものこころの成長に関する基盤整備事業」成果報告

（※HPにPDFあり）

富山大より

学生支援 GP “「オン」と「オフ」の調和による学生支援” 概要説明および支援事例

2. 高機能発達障害学生が望む高大連携の在り方に関する協議

<参加者からの提言>

- ・ 発達障害学生の中でも、高機能（特に大学進学レベル）に限ることで、多くの高校にとってニーズが小さいのではないか
- ・ 高機能になるほど、学校を含む周囲の困り感は少ない可能性があり、本人の自覚も乏しいとなると、進学校ほど連携の意味を持っていないのではないか（三橋先生）
- ・ 高校で必要としている支援は進学ではなく、もっと低いステージの支援だと感じることが多い（清水先生）

- ・ そういった背景の中で、今回の研究でいうところの連携とはそもそも何なのか。
（三橋先生ほか）むしろ、そこを見定めていくことが本調査の意義か
- ・ 高校に在籍する発達障害学生の詳細な実態把握は必須だろう（中井先生）
- ・ 高校、大学の教員にとって必要な連携の洗い出し
- ・ 調査の入り口は、当事者と保護者から高校に上がっていく方がスムーズではないか。また、アスぺの会などの親の会からのアプローチも検討すべきか
- ・ 実態調査や広報は、教育研究所（センター）や県教委に協力を求めるのが王道では
- ・ 高校では、PSNS 形式での支援は無理ではないか（学芸大付属高校の反応に関心）
- ・ 進学校にアピールできるとすれば、入試での配慮だが、現実としては入った後の支援の重要度が高く、その点で高校と大学ではニーズにずれが出るだろう。
- ・ 福井県ではフジシマ高校などが調査対象としては適当か
- ・ これまでに既にされている動きの中で、参考になるとすれば、福井県教委がしている、社会体験プログラムや D0-IT Japan2008 のような取り組みか
- ・ 福井では、県教委（岩井先生）で高校の相談担当者会議を開いていて、その中で発達障害のケースを通じてつながれる可能性があるが、石川・富山はどうか
- ・ 富山大としては、この連絡協議は大変有意義だが、福井大としての捉え（メリットなど）はどうか。（吉永先生）>>共同研究という名目でいいのでは（中井先生）富山大での取り組みのノウハウを共有させてもらいたい
- ・ 実際に動き出すのはいつ頃で、メンバーはどうなるのか（三橋先生）

2. 連絡協議から見てきた高大連携

まず、本研究に取り組むにあたり早い段階でこういった連絡協議の場を持てたことは大変有意義であった。

福井大学では「子どものこころの成長に関する基盤整備事業」の中で“高等学校における発達障害生徒の現況に関する調査研究”をしており、県内の高校の現状をよく把握された上での重みのある提言を頂けた。

この連絡協議から見てきたのは、第一に本研究が発達障害者支援の中でも大学進学を望める学力を持つ方々の進路上の支援に限定されるため、支援ニーズのある生徒、高校が非常に限定され、また高機能（知的に高い）になる程学校や周囲が支援のニーズを感じていない可能性を示唆していただけたことで、まずはニーズそのものを明確にし、高大連携の重要性を理解しやすい形で提示していくことが高大連携を推進していく前段階として重要だということである。

また、大学側の連携の必要性は主として入学直後のドロップアウトを防止することや修学支援のための情報収集であり、高校は卒業後のフォローアップに必要性を感じていない場合、その連携のニーズのずれの問題は最大の課題となる。現段階でニーズが一致するとすれば、入学試験での配慮と進路指導上のアドバイスまたはその情報提供だと考えられる。

他にも高校が連携をとりやすくする大学の動きとして、D0-IT Japan2008のような取り組みや大学として高校と連携をとる準備があること、またその必要性などを広報することも重要だと思われる。

次年度以降も福井県や上記大学とは情報交換を行いつつ高大連携の在り方を探っていく予定である。

富山大学における 発達障害学生の支援の在り方 ～発達障害高校生支援のヒント

1. 発達障害概論:西村 優紀美
2. トータルコミュニケーション支援室での取り組み:吉永 崇史
3. 富山大学における発達障害学生への対応:西村 優紀美
4. モデル校で行われている高等学校での取り組み:桶谷 文哲
5. 大学側から見た高等学校での必要な支援:西村 優紀美

富山大学 学生支援センター



「発達障害」とは

- 自閉症(Autism)、アスペルガー症候群 (Asperger Syndrome)とその他の広汎性発達障害(Pervasive Developmental Disorder)
 - 学習障害(Learning Disabilities)
 - 注意欠陥多動性障害(Attention-Deficit Hyperactivity Disorder)
 - その他のこれに類する脳機能の障害
- 症状が通常、低年齢において発現するもの

発達障害者支援法案の目的

- この法律は、発達障害者の心理機能の適正な発達及び円滑な社会生活の促進のために、
- 発達障害児を早期に発見し、発達支援を行うことに関する国及び地方公共団体の責務を明らかにするとともに、
- **学校教育における発達障害者への支援、**
- 発達障害者の就労の支援、発達障害者支援センターの指定等について定めることにより、
- 発達障害者に対し生活全般にわたる支援を図り、もってその福祉の増進に寄与することを目的とする。

注意欠陥・多動性障害(ADHD)

□ 多動

- ✓一つの課題に長く取り組み続けることができない
- ✓しゃべりすぎ・話題が飛ぶ

□ 集中力

- ✓すぐに気がそれる・忘れ物・物をなくす
- ✓興味のあることに過集中

□ 衝動性

- ✓思いつきで直ちに行動する
- ✓待つことが苦手で他人を妨害する

不適応→事件・問題行動・引きこもり

□ 対人関係での躓き

約束が守れない, 衝突しやすい, 感情的になりやすい, 誤解されやすい

□ 学業・仕事での躓き

期日に課題が終わらない, ものをなくしやすい, 計画倒れ, 予定が立たない, 時間にルーズ

□ 心身面での躓き

精神的な不調感、被害感が強い、怒りが蓄積する

高機能自閉症・アスペルガー症候群

□ 社会性

- ✓ その場の社会的常識をつかむことが苦手
- ✓ 一人でいることを好む

□ コミュニケーション

- ✓ 人の表情や言葉のニュアンスを察することが苦手
- ✓ 字義通りに受けとってしまう

□ 他者の視点

- ✓ 相手の言いたいことを理解することが苦手

□ こだわり

- ✓ 日課や習慣などの変化を嫌う
- ✓ 新しい状況に適応しにくい

不適応→引きこもり・鬱・関係念慮

- 周囲の状況に疎い
- 臨機応変に対応できない
- 人の話を字義通りに受けとり、その場の了解事項が理解できない
- 仲間との人間関係がうまくいかない
- 疎外感がある
- 被害感を持つ

障害(特性)から生じる問題や難しさ

- 本人の**努力不足、怠慢、性格の悪さ**からくるものではない
- **親の育て方が一義的な問題**ではない
- 失敗体験や対人関係のつまずきにより、二次的に**環境の影響**を受けやすい
- 重なり合う困難さ(複合する特性)

高等学校の特別支援に関する留意点

- 義務教育ではない
- 幼児期、学童期にどのような体験をしてきたかによって状態像が変わる
- 青年期の発達課題と自我同一性の問題
- 不登校、相談室登校の経験が多い場合、その時期の発達課題を乗り越えていない
- 二次障害が前面に出て、対応が困難
- 高等学校での先行事例は少ないが、すべての高等学校に在籍する可能性がある

<本人の「活動」と「参加」を保障する>

- 選抜試験を通過してきた生徒（学生）に対して
- この学校を選んで入学してきた生徒（学生）に対して
- 学校生活を充実させるために教育の場を整える
- 学校生活を送る上でのさまざまな不利益を被ることがないように適切な配慮をする
- **障害特性による困難さ**に対して配慮し、本人の「活動」及び「参加」が損なわれることのないようにする

＝特別支援教育

一貫した支援



個別の支援計画

「オフ」と「オン」の調和による学生支援

発達障害学生への トータルコミュニケーションサポート

「社会的コミュニケーションの困難さ」を抱える学生像

- 友人関係を求めず、サークル活動やアルバイトからも退却し、なるべくなら1人で楽しむことができる活動を好む。
- ゼミや授業のディスカッションで批判されると気分が落ち込み、気持ちを立て直すのに時間がかかる。
- 実習や実験の場で周囲との協調性に欠く。
- 教員との適度の距離を保つことができず、卒論の取組みがままならない。
- 就職活動をどのようにすればよいか見当がつかない。自分の長所がないように思え、どのような仕事ができるのか想像がつかない。
- 就職活動における面接で黙りこんだり、意欲をうまく伝えたりすることができない。

→あらゆる局面で「社会的コミュニケーションの困難さ」を抱える発達障害傾向にある学生にも対応できる、ユニバーサル・デザインを志向した学生支援システムを確立する。

富山大学に在籍する障害学生(把握人数)

(平成21年3月現在)

	把握している学生数	支援を受けている学生数
視覚障害	1	1
聴覚障害	3	1
肢体不自由	1	0
病弱(内部疾患等)	1	0
発達障害(HFASD) ()は診断を受けている学生数	19(5)	16(4)
発達障害(ADHD) ()は診断を受けている学生数	4(0)	4(0)
発達障害(HFASD・ADHD複合) ()は診断を受けている学生数	4(1) *ADHDの診断	4(1)
発達障害(LD)	0	0
合計	33	26

HFASD: 高機能自閉症スペクトラム
ADHD: 注意欠陥・多動性障害
LD: 学習障害

未診断・未告知(グレーゾーン)の学生にも対応できるような支援システムを構築することが必要

トータルコミュニケーション支援室のミッション

すべての学生の「社会的コミュニケーションの問題や困難さ」に焦点を当てた支援を「包括的(トータル)」に行います。



- 学生本人からの相談だけでなく、教職員や保護者からの要請も支援の出発点とします。
- 支援に先立ち、人間関係・学習・修学・就職活動上の「問題」や「困難さ」に向き合います。
- サポートチームを個別に形成し、学生本人の同意のもとに支援に必要な情報を共有して、統一感のある支援を行います。
- 「問題」や「困難さ」を整理して、解決や解消のための道筋や、実行に移すための方策を立てます。また、その実行そのものをサポートします。
- 学生を支援している教職員や保護者もサポートの対象とします。



コミュニケーションマークのデザインコンセプト

グリーンは「安らぎ」、ブルーは「清らかさ」、イエローは「明るさ」を表し、学生、教職員、支援室が補完しながら緊密に関わりあうイメージを描いています。メビウスの輪をモチーフに、「オフ」と「オン」の両面にわたって心身ともに安らかで、清らかな、明るい学生生活を送る心(ハート)のつながりを永続的にもたらし、トータルコミュニケーション支援室の役割をやさしい色調で表現したマークです。

トータル・コミュニケーション・サポート のための方法

□ 「オフ」と「オン」が調和する学生支援システム(場)の構築

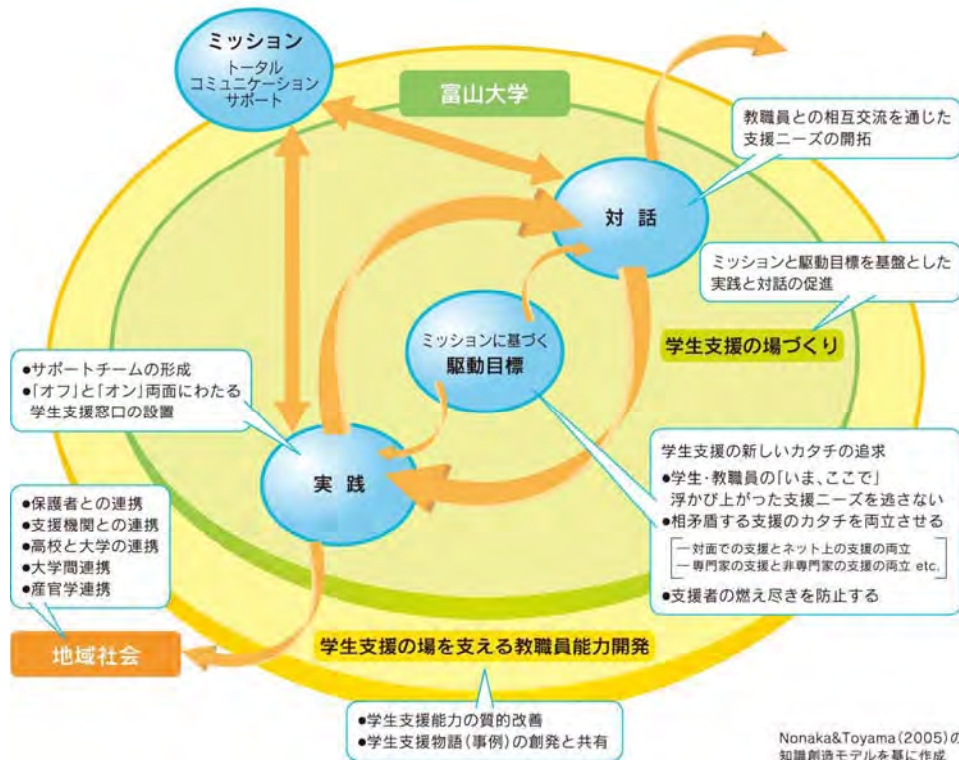
- ✓ 対面式(オフライン)でのサポートに加えて、ICT技術を用いたWeb上(オンライン)でのサポート(富山大学PSNS: Psycho-Social Networking Service)を展開し、**相談窓口の多チャンネル化**を志向する。
- ✓ 1対1のサポートを補完する「多対多のサポート」(支援者、被支援者が複数)の形態を積極的に活用する。

□ コミュニケーション上の問題に対応する総合窓口の構築

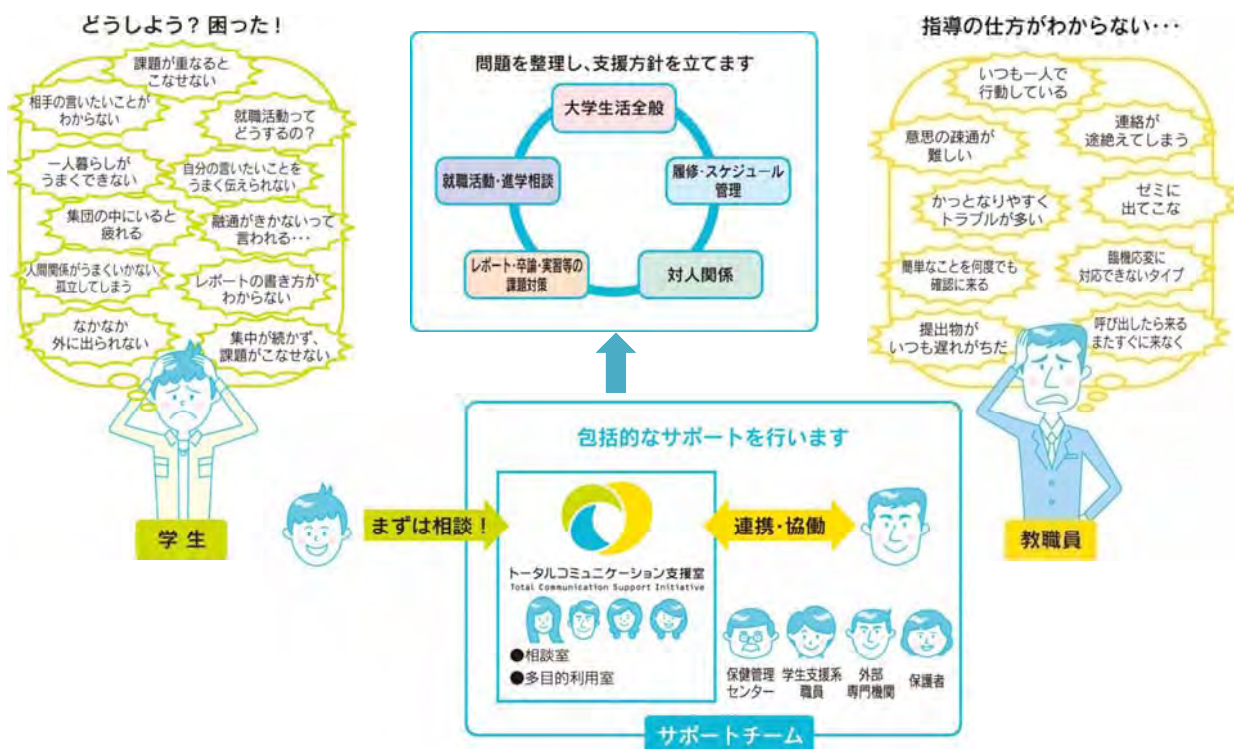
<特別支援教育学×臨床心理学×医療学×経営学>

- ✓ トータルコミュニケーション支援室を、学生支援センター(全学組織)の下部組織として設置。保健管理センターと密接に連携。
- ✓ 教員(専門:経営学)と事務補佐員2人を専任として支援室に配置し、**「知識経営(Management by Knowledge)」**の実践を行う。
- ✓ 専門家(医師、臨床心理士、特別支援教育士スーパーバイザー、特別支援教育研究者等)が当室の活動を支える。

トータルコミュニケーション支援室の活動モデル 知識経営(ナレッジ・マネジメント)の実践



トータルコミュニケーション支援のイメージ

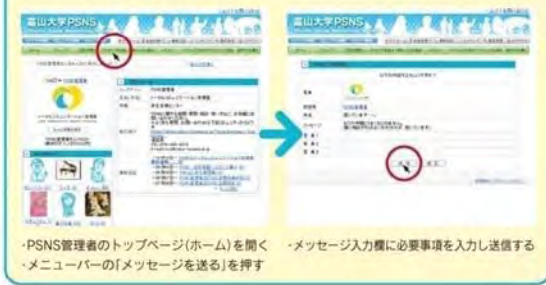


トータルコミュニケーション支援の流れ

1 困ったことがあれば、まずは支援室に連絡してみよう！



富山大学PSNSでメッセージを送信



- ・PSNS管理者のトップページ(ホーム)を開く
- ・メッセージ入力欄に必要な事項を入力し送信する
- ・メニューバーの「メッセージを送る」を押す

2 どんなことで困っているか、支援室の相談員・コーディネーターが話を聞きます。

3 今後の相談・サポートの方法を決めていきます。

- 面談 (オフライン)** 個別に面談日程を決め、定期的に面談・サポートを行っていく方法です。
- 富山大学PSNS (オンライン)** 富山大学PSNS上での日記・コミュニティ・メッセージのやりとりを通してサポートを行っていく方法です。

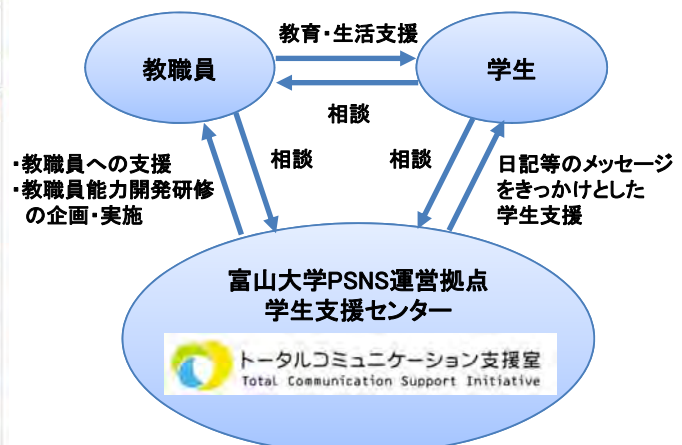
4 トータルコミュニケーション支援室でのサポート開始！

- 学生が抱えるそれぞれの困りごとに合わせたサポートを行います **手づくり支援**
- 自己理解を深めるカウンセリングを行います **心理教育的支援**
- 自分自身の特性を生かす方法を一緒に考えます **コーチング**
- 周囲の人たちの悩みや不安に向き合います **支援者へのサポート**
- 自分の良さを生かした就職・進学のサポートを行います **キャリア支援**

富山大学PSNSの運用イメージ



- ・日記の書込み、コメント
- ・コミュニティ運営、コミュニティへの参加
- ・学生・教職員同士の交流



- ・利用者登録・個人情報管理
- ・不正投稿の対応
- ・PSNS利用をめぐる問題解決
- ・PSNS活性化支援

富山大学PSNS運用状況

(2009年2月28日現在)

- 登録人数:2,002名(うち教職員667名、学生1,335名)
→富山大学構成員の約20%
- 参加(ログイン)人数(参加率):729名(36.4%)
→教職員289名(43.3%)、学生440名(33.0%)
- 活性化指標
 - ✓ 7日以内のログインユーザ:192名
9.6%(登録人数ベース)、26.3%(参加人数ベース)
 - ✓ 運用開始以降累積アクセス数:502,728PV(平日で約2,500PV/1日)
 - ✓ 日記数(コメント数):1,854件(7,727件)
→1日記あたりのコメント数:4.2件
 - ✓ コミュニティ数:136件
 - ✓ コミュニティのピック・イベント数(コメント数):670件(2,473件)
→1ピック・イベントあたりのコメント数:3.7件
 - ✓ 本、映画等のレビュー数:27件

富山大学PSNS運用ポリシー

- 教職員の負担感と不安感を軽減する。
 - ✓ 教職員の参加は自由意思を原則とする。
 - ✓ 匿名性は担保されない。実名の登録は必須ではないが、管理者はユーザーを容易に特定できることを周知し、抑止効果を狙う。
 - ✓ 教職員の困り感を共有し、PSNS上でのトラブル解決にコミットする。
 - ✓ 安全な環境を醸成するために、不正投稿監視のみならず、管理チーム側も積極的な情報投稿を行う。
- 学生が投稿した「全員に公開」日記には、PSNS管理チームが必ずポジティブなコメントを書き込む(目標は2件以上)。
- ホスピタリティ(おもてなし)の精神でPSNSを運用する。学生・教職員が「期待した以上の体験」をPSNS上で得られるための努力を惜しまない。
- PSNS活用事例をユーザーと一緒に作り上げ、企画・実践・評価・共有のサイクルをマネジメントする。